音楽文化創造学科教授　金子　敦子

１．研究活動

【学会発表】 第62回日本シルク学会大会発表 「国産蚕品種による絹箏弦の開発―絹弦の普及―」	2015. 5. 22	岡谷商工会議所３階大会議室（長野県岡谷市）	箏糸には、昭和40年頃までは絹弦が使われていたが、化学繊維の開発により近年では化繊弦が主流である。化繊弦にも長所はあるが、音色の点では絹弦に勝るものはない。我々の研究会（国産絹箏弦普及の会-代表：徳丸吉彦）は７年に渡り、国産の蚕品種を用いて耐久性、音量、音色に優れ、奏者の身体に負担の少ない絹弦の開発を行ってきた。今回の発表では、その改良絹弦の普及活動の報告を行った。絹弦による演奏会の開催、絹弦を箏にかける糸締め講習会の開催など、絹弦に触れる機会を増やすことが、絹弦の普及に役立つと考える。さらに、13弦の箏のほかに一弦琴や二弦琴など別種の琴への絹弦の普及についても触れた。

【演奏会】 「第二回国産絹箏弦を聴く会」	2015. 12. 21	紀尾井小ホール（東京）	研究会「国産絹箏弦普及の会」（代表：徳丸吉彦）が長年に渡り開発してきた絹の箏弦を使用し、第２回演奏会を開催した。聴衆に絹弦の音色の魅力を伝えるためである。演奏会では、絹弦と化繊弦の音色の比較演奏も行った。なお演奏会に先立ち、若手演奏家に対して絹弦と化繊弦の両方に触れる体験会を実施した。両者の違いについてアンケート調査を試み、調査結果については報告書としてまとめた（下記）。
【報告書】 『第二回国産絹箏弦を聴く会』報告書（DVD付き）	2016. 3	国産絹箏弦普及の会	2015年12月21日に紀尾井ホールで開催したコンサート、および絹箏弦に触れる体験会についての報告書。演奏会の内容、体験会でのアンケート調査結果について報告している（演奏会のDVD付き）。実際に音色を聴く機会、若手演奏家が絹箏弦に触れる機会を増やすことが、今後の絹弦の普及につながると考える。 報告書：全28頁（本文18頁+資料10頁）（金子担当：本文8-15頁）
【社会活動】 平成26年度 全国子供大正琴コンクール	2015. 8. 22	ウィルあいち　ウィルホール（名古屋） 主催：公益社団法人大正琴協会	審査員。大正元年に名古屋出身の森田吾郎により発明された大正琴の次世代への継承を目的とし、平成18年から始まったコンクール。対象は全国の子供大正琴愛好者。

2．教育活動（教育実践上の主な業績）

大学院授業担当　□有　■無

授業科目名　「音楽教育Ⅲ」（ゼミ）	
◆前期　◆後期	
工夫の概要	教材・資料等の概要
平成27年度のテーマは、「日本のユネスコ無形文化遺産」であった。各自が担当箇所を調べ、発表し、最終的に報告書にまとめた。学年末には、無形文化遺産のひとつである那智の田楽が行われる場所に赴き、芸能が行われる場を実際に確認した。報告書：全46頁。	
授業科目名　「音楽教育Ⅳ」（卒業論文）	
◆前期　◆後期	
工夫の概要	教材・資料等の概要
本科目は卒業論文である。各自が１年間かけて研究してきた内容を、後輩の前で発表する「卒論発表会」の場を学年末に設け、意見交換を行った。発表に際しては、レジュメの作成方法、パソコンを使用した発表方法等について指導を行った。	

3．学会等および社会における主な活動